広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる社会科授業・カリキュラム開発 ： 第４学年「わたしたちの町に伝わるもの－平和への願いを伝えるエスキーテニス－」を事例に
Author(s)	野元, 祥太郎
Citation	研究紀要 ／ 広島大学附属小学校 , 52 : 47 - 52
Issue Date	2024-07-30
DOI	
Self DOI	10.15027/55609
URL	https://doi.org/10.15027/55609
Right	
Relation	

広島大学附属小学校『研究紀要』第５２号　2024

〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる社会科授業・カリキュラム開発
ー第４学年「わたしたちの町に伝わるものー平和への願いを伝えるエスキーテニスー」を事例にー

野元　祥太郎

１　〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる社会科カリキュラムと連動

わたしたちの周りにはたくさんの正解がない社会問題が存在する。そしてわたしたちは，しばしば，それらから目を背けたり考えることをやめたくなったりする。そのような自分にとって異質な対象は，自分にとって苦痛や迷いを伴いながら向き合うことが要求されるからである。本校では，そのような〈他者〉との出合いを肯定的に捉えたり粘り強く問い続けたりするような子どもを育てることを大切にしている。

本校社会科部では，令和４・５年度，〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成を目指した初等社会科カリキュラムの編成原理として次のような点を見出している。

〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育てる初等社会科カリキュラムの編成原理

①論争問題を取り上げること

②「社会・経済」「環境・文化」「健康・安全」のスコープをもとに第３学年から第６学年の学習内容を編成すること

③子どもには見えづらい（主流の語り・説明から排除されがちな）様々な立場や視点を取り上げること

既に述べられているように,特に②は論争問題を取り上げるにあたってどのように初等社会科４年間のカリキュラムを編成するべきかを検討したものである。長川（2022）がレトリックに着目し開発したスコープをもとに学習内容を配列し，より全体像を捉えながら目指す子ども像に向けた指導を進めている。また，令和５年度より複数の教科や総合，学校行事等を，特定のコンテンツを軸に近接・関連付けさせながら,〈他者〉を楽しみ続ける子どもを一体的に育成しようとする取り組みを始めている。先の②の取組により，さらに他の教科等とのコンテンツ上の連動が図りやすくなったことも効果として捉えている。しかし，この際重要なのは，意図的・計画的に年間スケジュールに各教科・領域が配置されることだけではなく，各教科・領域等が子どもの変容を意識したアプローチを取り入れることだと考える。では，社会科は，どのようなアプローチをもって，寄与できるだろうか。それは，子どもたちが出合い，向き合う概念について，問い直したり，崩したり，再構築したりする学習過程を取り入れることだと考える。例えば，第３学年では，図１のように「公正」「包摂」を軸に各教科等の連動を図った。この際重要視したのは，社会科「こども図書館の移転問題」を

通して，「“みんな”のイメージはどうだったか」「公正とはどんな意味なのか」「真に共に生きるとはどういうことか」等，子どもがそれまで持っていた「公正」「包摂」概念について省察的・批判的に再考したり，問い直したりすることであった。社会科は，位置的な見方や歴史的な見方，対立と合意等の現代社会の見方を働かせる等，社会的事象や社会問題を様々な見方・考え方で捉える，捉え直す点に教科の特質があると考えている。連動の軸にあるコンテンツに関わり各教科等で出合う見方や考え方を整理しつつ，社会科においては他にはない視点に出合わせたり，再考を迫らせたりするような学習過程を設定したい。

このように，社会科が果たすべき教科固有の役割を果たすことで，コンテンツで結ばれた学びは停滞することなく，さらに異質な考えや場面に向かっていく姿，自分の認識の変化や更新を肯定的に受容しようとする姿につながると考える。

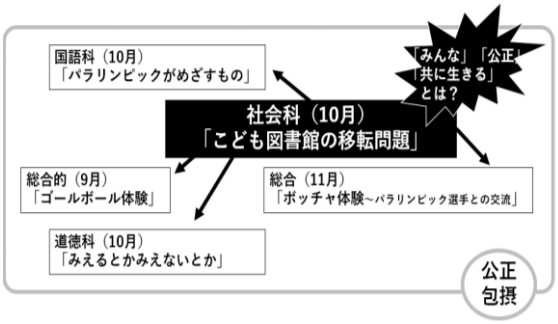

図１　第３学年「公正」「包摂」で連動させる場合

２　単元とカリキュラムの連動の構想

(1) 単元「わたしたちの町に伝わるもー平和への願いを伝えるエスキーテニス」

(2) 単元デザインとカリキュラム上の位置付け

本単元は，小学校学習指導要領における「(4) 県内の伝統や文化，先人の働き」に関わり，県内の伝統や文化について取り上げる学習である。「環境・文化」のスコープとして，表１のような系統の中に位置付けている（編成原理②）。

本単元では，その伝統や文化の一つとして広島生まれのスポーツ「エスキーテニス」を学習材とする。エスキーテニスとは，被爆直後に広島市内で生まれたスポーツであり，羽が付いたピンポン球程度のゴムボールを木製ラケットで打ち合う競技である。平和を願う，平和の大切さを広げるスポーツ，そして焼け野原となった廃墟でも材料や道具が少ない戦後でも誰でも簡単に楽しめるスポーツとして当時の発明家・宇野本信氏が開発したものである。このように，被爆地ヒロシマとしてとても意義深い歴史と価値をもつスポーツではあるが，多くの人に知られていない現状もあり，その存続を賭けて日々普及活動が続けられているところである。

	環境・文化
３年	公共施設の移転問題
４年	伝統や文化の変容と継承のあり方
５年	森林保全ための施策
６年	地球規模の環境問題と持続可能性

表１　本単元におけるカリキュラム上の位置付け

以上のような点を踏まえ，本単元においてはエスキーテニスを始めとするスポーツ文化や文化の継承の在り方を論争問題として設定する単元とした（編成原理①）。小原（2012）は，伝統文化を価値づける尺度として，「継承性（その文化が次の時代に受

け継がれるものであるかどうか)」「独自性（その地域ならではの個性・特色が盛り込まれたものであるかどうか)」「現代性（時代の変化の中でその文化が新たな価値を創造しているかどうか)」の３点を挙げている。エスキーテニスはまさに現在進行形で次の世代に受け継ぐことが課題となっており，今現在，被爆地ヒロシマとしての平和希求という視点からその価値と継承の在り方について見直されている段階である。スポーツ文化を話題にしつつ，伝統や文化それ自体の在り方についても考える単元を目指した。なお，本単元では単元全体で文化の要素に着目しながら考えられるようにした。山上（2010）は，図２のように文化の要素を「精神的文化」「制度的文化」「物質的文化」の３つに整理している（p.3)。また，中澤（2012）もスポーツの文化的構成要素として,「観念的成果（スポーツ観)」「制度的成果(スポーツ行動様式)」「物質的成果（スポーツ物的事物)」の３つに整理にしている（図３)。文化の学習において，スポーツ文化を取り上げるのであれば，この共通性に着目させることが有効だと考えた。これによって，児童にとっては思考する視点ともなるとともに，自分が普段見えていない視点を可視化させながら思考することを促すことができる可能性があるからである（編成原理③)。特に，多くの子どもにとっては精神的文化（図２）・観念的成果（図３）が文化やスポーツ文化について考える際見えづらい視点だと言える。この視点も意識的に取り上げながら論争問題について考え，問い続けることを促していきたい。

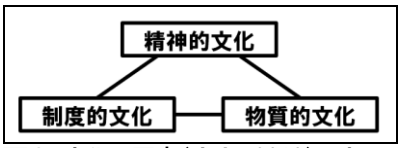

図2 文化の要素(山上，2010)より引用

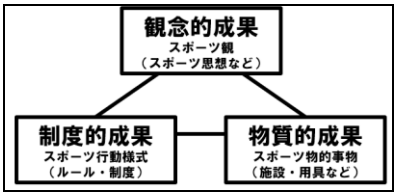

図3 スポーツの文化的構成要素（中澤，2012)をもとに作成

(3) 他教科等とのカリキュラムの連動

本単元は,「平和」「継承・伝承」を軸にしてカリキュラム間の連動性を図った。特に,「継承・伝承」は本単元の核心をつく重要な概念である。子どもたちは，７月社会科「平和大通りのこれから」において，平和大通りの歴史や発展・維持に関わる先人たちの働きについて学習してきた。その際,平和大通りのリニューアル事業に関わり，平和大通りに期待される新しい役割を取り入れながら，戦争や被爆の記憶をどのように伝える道路であるべきか，という点について考えた。また,総合的な学習の時間においては,被爆樹木の絵本作家や被爆体験伝承者など，それぞれの形で原爆や戦争について継承・伝承を図ろうとする

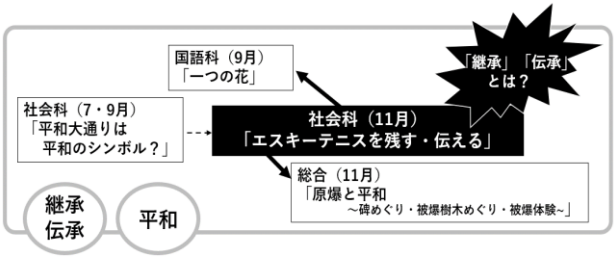

図４　第４学年「継承・伝承」で連動させる場合

人々に出合わせた。そのような連動の中で，本単元は「継承」「伝承」とは何か，また大切なものは何かを問い直すことができる契機となることを目指して位置付けた。

(4) 指導目標・指導計画

① 指導目標

○エスキーテニスは，地域の人々が創り出し受け継いできたことや，それらには地域や社会の発展など人々の様々な願いが込められていることを理解している。また，地図などの資料で調べて，年表などにまとめている。

○歴史的背景や現在に至る経過，保存や継承のための取組などに着目して，エスキーテニスの継承や発展を捉え,人々の願いや努力を考え,表現している。

○エスキーテニスの継承や発展について，主体的に問題解決しようとしたり，よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。

② 指導計画

第１次 広島の文化とエスキーテニス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

第２次 エスキーテニスを保存・継承・普及させる人たちの働き・・・・・３

第３次 エスキーテニスのこれから・・・・・・・・・・・・・４（本時３／４）

(5) 本時の目標

エスキーテニス文化の保存・継承の在り方について，文化の要素に着目しながら考えることができる。

(6) 本時の学習展開

学習活動	指導の意図と手だて	評価の観点
１．エスキーテニス文化の歴史や現在の課題を確認する。	・エスキーテニス文化（それ自体）は，スポーツ文化の３つの要素に着目して振り返ることで，本時の課題解決につながるようにする。	
２．スポーツ文化の変容の具体例を取り上げ本時の課題を設定する。	・前時まで「知ってもらう」「広がるための土台づくり（大会等の実施）」に着目し保存・継承の在り方を考えている人が多いことを取り上げ，スポーツ文化自体の変容の可能性も問う。	
エスキーテニス（文化）それ自体は，変わってもいい？変わってはいけない？		
３．本時の課題について自分の考えを形成し，議論する。	・スポーツ文化の３つの要素に着目しながら意見を整理することで，自他の考えの相違が分かりやすいようにする。 ・「(まずは) 知ってもらうこと」の価値やスポーツ文化の変容による危機等も取り上げることで，学級全体の議論を揺さぶることができるようにする。★他のスポーツ文化の事例	・文化それ自体の変容について，スポーツ文化の３つの要素に着目しながら考えている。(ノート・発言)
４．単元の学習問題について再度自分の考えを形成し，表現する。	・単元の学習問題「エスキーテニスは，これから，どのように伝えられ，競技されるためにはよいか」を再度取り上げ，自分の考えを整理する。本時の学習内容と結び付けることで，自分の考えの変容が実感できるようにする。	・これまでの意見を見直しながら，文化の保存・継承の在り方について考えている。(OPPシート)

３　授業の実際と分析

児童は，本時に至るまでに「エスキーテニスにこめた願い・思い」「エスキーテニス文化をつくるルール・仕組み」「エスキーテニス文化の道具・モノ」の３つの視点でエスキーテニスがどのように生まれ伝えられ残されてきたのかについて学習した。それらを踏まえ，本時は継承の危機にある中でエスキーテニス文化それ自体を変えて伝承することの是非を論争問題とし，議論する場面である。次のような発言があった。

発話記録

C1　私は変えてはいけないと思うんですけど。(中略) ごっそり変えなければ，文化が変わったとは言えない。(中略) 前に出てきた特別ルールみたいなもので対応してもいいと思う。

C2　私はエスキーテニスはちょっと難しいしやりにくいと思った。でも，変えて楽しくやりやすくすれば，もっとやる人が増えると思ったから。

T　C2 さんは何を変えることを考えたのかな？

C2　全部変えること。

C3　さっき出た「鶏の羽からナイロンに変えた」という話があったと思います。物がない時代だったから変えただけであって，それを変えたことによって「鶏の羽さえ手に入れられないほどひどい時代だった」ということが分かる。エスキーテニスは，戦後子どもたちが遊ぶために作られたもの。

C4　やりやすいほうでやったほうが怪我もしにくくやりやすい。鶏からナイロンに変わったとして，それも文化が変わったから，それくらい変わってもいいと思った。

T　今のは，道具が変わっても良いという話だね。

C5　戦後すぐに生きていけるか分からないときに信さんが子どもたちのために作ったのだから，ルールや道具が変わっていたら，やめてしまった人が再び取り組むのに困るのではないか。

C6　ぼくは，別に変えてもいい。このまま変えなければ進化せずにこのまま忘れられてしまう。

C7　たぶん，C6 くんが言っていたのは，人がもともとやっていたものを自分たちでやりやすいように文化を変えていって生活しやすいようにやりやすいようにしていくから，ルールも同じように変えてもいいのではないか。

C8　僕は変えてはいけない側なんですが。信さんは原爆が落ちで焼け野原でできるスポーツを考えたものだから簡単に変えると信さんが悲しんでしまう。

C9　エスキーテニスを通して仲良くなれることを込めて作ったものです。信さんはものひとつひとつに思いを込めたものだから，それを変えてしまうと思いも変わってしまう。

T　この３つだったら一番大事にしないといけないものはどれ？これなら，変えてもいいというものがある？

C10 場合によっての話ですけど，ルール・仕組みや道具・物をちょっと変えただけで，願い・思いが変わることもあるから，願い・思いが土台？

その後，他のスポーツ文化の事例としてバレーボールのルール改正や水泳の水着の改良とそれによる影響の資料を示した。その上で改めて自分がどのように考えるかをについて意見形成を求めて本時の学習を閉じた。以下は，本単元についてのＯＰＰシートの記述内容ならびにヒロガルシートの記述内容を抽出したものである。

ＯＰＰシートの記述内容	ヒロガルシートの記述内容
①ルール・仕組みは，みんなにエスキーテニスに親しんでもらうために変えてもいいけれど，道具などは平和への願いが込められているので変えない方がいい。 ②道具は歴史があるから残した方がいい。ルールは競技人口が減っていく現実の中で難しいルールを簡単にして競技人口を増やしてから歴史を伝えたほうがいい。でも宇野本さんたちの思い・願いは変えない方がいい。	①エスキーテニスは「ルールがむずかしい」などの理由でこまっている。改善として「ルールが変わった方がいい」という人と「ダメ（自分)」という視点が違う。「変える：今の人の思い」「変えない：信さんの思い」自分はダメという考えだったけど，２つの意見を合わせた考えにした。 ②エスキーテニスで歴史やルールをよく知れた。自分が平和で楽しんでいる楽しさと，戦後何もない

③スポーツは一番願い・思いが大事。なぜならもし，ルールや道具・モノだったら，そもそもスポーツとは何がねらいで作られたのかを分からなくなってくる。 ④ルールやしくみ，道具やモノをかえていってじょじょに進化していくといい。バレーや水泳も進化してきた。	ところでの楽しさは違うと思った。自分は新しくならなかった。 ③思いを残しながら，よくして，かいりょうして，スポーツのよさを残しながらも後世に伝えていくのはわたしたちだ。だから，僕はエスキーテニスを伝えてゆくことをがんばりたい。

本単元では，文化・スポーツ文化の要素を取り上げ，特に精神的文化・観念的成果に注目させながら，文化の伝承や継承の在り方について考えた。県内の伝統や文化の継承・保存の学習においては，しばしば先人と受け継ごうとする人の努力や工夫のストーリーとして描かれがちであるが，存続の危機においては時代に合わせた変容が余儀なくされることがリアルなところである。この困難さを取り上げたことで，文化それ自体への構造的な理解が深まったといえる。特に，発話記録 C10 や OPP シート③の子どもに見られるように，精神的文化がうまく伝わらないことやそれによる影響を考えたことは山上（2010）においても述べられているオグバーンの文化的遅滞理論にも通ずる点がある。一方で，OPP シート①・②の子どものように，精神的文化に着目させた際，平和という社会全体で共有されやすい理念や長い歴史を根拠に思考することで，無批判に自分の意見を形成しようとする姿も見られがちであったため，資料や議論における介入の工夫などによる改善が必要であった。

最後に，本校で取り組んでいるヒロガルシートでは，教室の〈他者〉との意見の相違や自分自身の変容や新たな思いに触れた記述が多く読み取れた。②の子どもは，授業ではあまり表出できなかった波線部の考えがここでは表現できた。社会の仕組みを学ぶとともに,「自分にとってどうか」という視点で振り返らせるこのシートは主権者を育てる社会科教育としても価値が大きいと考えた。一方で，学期末に行うヒロガルブックの作成においては，授業者がねらっていた「継承」「伝承」の在り方を教科を超えて考えようとする記述があまり見られなかった。カリキュラム構成としては，連動の軸が子どもに自覚されにくくなっていたことを課題として捉えている。引き続き，教科等の連動を意識した単元の開発に取り組んでいきたい。

（主要参考文献）
・菊地邦雄（1978）『エスキーテニス 広島で生れ育ったスポーツ技術と科学的分析』杏林書院
・小原友行（2012）「伝統文化を図る視点・尺度とは」『教育科学 社会科教育』明治図書，2 月号
・中西純司（2012）「「文化としてのスポーツ」の価値」『人間福祉学研究』第 5 巻，第 1 号，pp. 7-24
・新谷和幸・中丸敏至・伊藤公一・服部太・沖西啓子・木村博一・永田忠道（2015）「文化に焦点化した「グローバル社会学習」の授業開発－附属小学校 3 校の連携を生かして－」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』43 号，pp. 153-162
・長川智彦（2022）「小学校社会科における実在問題としての「社会問題」の内容編成－領域と配列の設定に着目したカリキュラムの構築を目指して－」『社会認識教育学研究』37 巻，pp. 21-30
・山上徹（2010）「文化の伝播と精神的文化の輸出」『関東学院大学文学部紀要』120・121, pp. 1-19